

令和4年度 かほく市立外日角小学校 学校評価最終報告書

※肯定的結果が前期より3%以上上がった(太字)下がった(二重線)

重点目標	具体的取組		主担当	現状	評価の観点	達成度判断基準	肯定的結果	達成度	結果より	今後の方針	学校関係者評価
1 授業後半の充実と深い学びの実現	①	学習意欲を高める指導の工夫を図る	学習指導部	「やってみたい」「考えたい」という学習意欲には個人差がある。自分の考えをもつことが難しかったり自信がもてなかったりする児童も見られる。	【成果指標】 解決したくなる課題設定の工夫や課題解決を見通すための手立てを行っている。	一日の授業で、 A：3時限以上できている B：2時限以上できている C：1時限以上できている D：ほとんどできていない	84% (教)	B	肯定的評価が前期より5%下がっている。	課題や問題に対して、「分からない」ことも認め、できたことを実感できるように、児童の実態に応じてスモールステップで支援していく。また、デジタル教科書等、視覚化し場面や文章を把握しやすいように努める。	・授業でもメディアとの付き合いでも「自分で考えさせること」を大切にして取り組んでほしい。
	②	授業後半の充実と深い学びの実現を図るために、ねらいに迫るための発問を工夫し、学び合う場を設ける★	学習指導部	他の児童の考えを聞いて自分の考えを再考したり、考えを練り上げたりする力が弱い。自分の考えの変容を感じている児童も多くない。	【成果指標】 深めの発問（切り返しや問い返しの発問）の準備をして実践する。	A：よくあてはまる B：おおむねあてはまる C：どちらかといえばあてはまらない D：あてはまらない	94% (教) 92.2% (児)	A	児童「授業が分かりますか」教師「深めの発問の準備をしている」のA評価が、前期より共に4%程度上がっている。	教師が授業後半の充実を図る意識をもち、ねらいを達成できるように、発問を吟味したり、授業の展開に高まりや変化をつけられるよう活動を工夫したりする。授業後半に山場を迎える意識を教師も児童ももてるような授業づくりを目指していく。	
	③	家庭学習の定着・習慣化を図る	学習指導部	学年に応じた家庭学習の指導の継続により、宿題の提出率はよくなってきている。個別指導が必要な児童は複数いる。	【成果指標】 宿題の提出率が90%以上である。	A：90%以上の児童ができる B：70%以上の児童ができる C：50%以上の児童ができる D：50%未満の児童ができる	100% (教) <u>69.6%</u> (児)	B	児童「自分で計画を立てて勉強しているか」のA評価が、前期より8%下がったため、肯定的評価が下がっている。	「自分で計画を立てて勉強する」については、学年に応じてより具体的に指導する。自己のめあてをもち達成する姿や自分で段取りを決めて実行していく姿を奨励しつつ、児童・保護者・職員で共通理解を図っていく。	
2 学習場面に応じた1人1台端末の効果的な活用	①	学校で読書する習慣を身に付ける	学習指導部	低学年は、図書館に楽しんで通う姿が見られるが、高学年になると進んで読書をする児童が少なくなる傾向がある。	【成果指標】 週に1回図書館を利用する児童が80%以上である。	A：80%以上の児童がいる B：70%以上の児童がいる C：60%以上の児童がいる D：50%以上の児童がいる	<u>77%</u> (教) 55.6% (児) 59.6% (保)	C	児童・保護者・教職員の肯定的評価が、前期に比べて2～3%程度下がっている。	引き続き、児童への教師の声かけを行っていく。また、「読書賞」を達成した児童を集会や全校の放送で紹介するなど、取組を広められるようにする。さらに、読書の効果を児童に知らせ、積極的に読書に取り組む児童の育成を目指していく。	・児童の評価が低いことが残念である。学校での対応も大事だが、各家庭での意識を高める啓発を続けてほしい。 ・先生方が紹介してくれた本があれば、児童の読書の動機づけになるのではないか。 ・読書の割合が低いのは、インターネット利用との関連が高いと思う。市立図書館の電子図書の活用も考えていく。
	②	児童の主体的、対話的で深い学びを実現するために、ICT機器を積極的に活用する	学習指導部	授業のねらいを達成するための、ICT端末・機器の効果的な活用は、これからの段階である。	【努力指標】 問題解決のためのツールとして活用できるよう、系統的な指導の機会を確保する。	A：よくあてはまる B：おおむねあてはまる C：どちらかといえばあてはまらない D：あてはまらない	84% (教) 93.4% (児)	B	児童・教職員共に肯定的評価が80%を超えている。特に、児童の肯定的評価は4%上がっている。	引き続き、積極的にICTに関する研修の参加を奨励し、職員に還元していく。Classroom等で実践を載せ、いつでも見て参考にできる環境も継続していく。Wi-Fi環境を整え、授業中に作業等が止まることのないよう、整備できるとよい。	
3 いじめ・不登校・問題行動等の未然防止・早期対応	①	児童理解をもとに学校が楽しいと言える人間関係づくりに努める★	生徒指導部	自己肯定感が低く、学校が楽しくないと感じている児童が約13%いる。	【満足度指標】 児童が学校が楽しいと感じている。	「学校は楽しいですか（楽しいと言っている）」に対して、AもしくはBと答えた児童・保護者が A：90%以上いる B：85%以上いる C：70%以上いる D：70%未満いる	89.3% (児) <u>88.6%</u> (保)	B	児童の肯定的評価は、前期に比べて上がっている。それに対して、保護者の肯定的評価は前期に比べて3%程度下がっている。	特別活動部と連携を図りながら、委員会や学校行事など、さまざまな場面で児童に任せる場面を設定し頑張りを認めていく。児童の自己肯定感や自己有用感が少しでも高まるよう、いいねカードの取組も継続して行う。	・学校公開では、児童の作品がたくさん展示されていて生き生きした雰囲気だった。学校が楽しいと感じられた。 ・草取りのお礼の手紙や高齢者への全校児童からの寒中見舞いの取組があり、大変喜ばれた。学校から地域へ発信する大変良い取組である。 ・自己肯定感が低い児童が13%いるのが気になるが、本校の児童は元気で活発な子が多いので、行事を中心に成長していけると思う。行事の中で自己肯定感を育み、自分の良さを見つけ、他人の良さを引き出すような関わりを持たせてほしい。
	②	いじめは絶対にいけないという意識を育てる	生徒指導部	「いじめは絶対にいけない」と思っていない児童が約3%いる。	【成果指標】 児童が「いじめはどんな理由があってもいけない」と感じている。	「いじめはどんな理由があってもいけないことだと思いますか」に対して、AもしくはBと答えた児童が A：95%以上いる B：90%以上いる C：80%以上いる D：80%未満いる	96.4% (児)	A	児童のA評価が、前期と比べて3%増えており、D評価が下がっている。	今後も、可能な限り複数での聞き取りを行う。被害者・加害者双方の気持ちに寄り添いながら話を聴くことを大切にしていきながらも、「いじめはどんな理由があっても許されない」ことであるという意識で指導にあたる。	
	③	特別支援教育を充実させることで、いじめ・不登校の未然防止を図る	生徒指導部	個別に支援を必要としている児童が全体の10%以上いる。	【努力指標】 児童理解の会や学年会、終礼等で、児童の実態把握や問題の早期対応に努める。また、必要に応じて外部機関とも連携する。	A：よくあてはまる B：おおむねあてはまる C：どちらかといえばあてはまらない D：あてはまらない	100% (教)	A	肯定的評価は、前期同様の結果である。	今後も、終礼や学年会での児童理解を継続していく。また、地域支援室など外部機関との連携を積極的に行ったり、ケース会議を開き支援策を協議したりするなど、それぞれの児童に合った対応や支援ができるようにする。	
	④	児童が主体的に活動できる場を設定すると共に、集団の中で協力する心や他を思いやる心を育てる	特別活動部	なかよしグループ活動には、楽しく参加しているが、協力し合ったり、助け合ったりする関係が十分にできているとは言えない。	【努力指標】 なかよしグループ活動に自分から進んで活動に参加し、楽しむことができる。	A：よくあてはまる B：おおむねあてはまる C：どちらかといえばあてはまらない D：あてはまらない	92.6% (児) 100% (教)	A	児童・教職員共に肯定的評価が90%を超えている。	今後も、継続して教師からの認める声かけの場や異学年間のいいねカードを活用した認め合いの場を積極的に設け、協力したり思いやりしたりする価値に気づかせ、意欲の向上を図る。委員会活動でも縦割りで活動するイベントを企画するなどして、集団で取り組む活動を通して児童全体で学校をよくしようとする意識を高める。	・「いいねカード」の取組は大変良い取組である。誰かから認められる喜びを感じてほしい。

4 視力低下防止と体力・運動能力の向上	①	メディアに関わる時間や就寝時刻等を把握し、自己の生活を振り返る取組によって視力低下の防止を図る	保健安全指導部	平日に、ゲーム・SNSや動画視聴など長時間にわたり画面を凝視している児童が多い。そのために就寝時刻が遅くなりがちになり、視力低下につながっている児童が少なくない。	【成果指数】 長時間メディアと関わることの危険性を理解し、メディアとの付き合い方をコントロールできる。	平日にゲーム・SNSや動画視聴など、インターネットを利用する時間が1時間未満と答えた児童が A：80％以上いる B：70％以上いる C：50％以上いる D：50％未満いる	34.4% (児) 29.3% (保) 18% (教)	D	児童の1時間未満の視聴が、前期に比べて9％程度下がっている。3時間以上視聴している児童は、前期より2％増えている。保護者・教職員の評価も下がっている。	メディア時間を短くすることは難しい状況にあるため、長時間の利用にならないよう取組を考えたい。今後は、単発の指導に終わることなく、年間を通して、効果的な指導となるように取り組む。その中で、自己の生活を振り返り、メディアとの付き合い方について考えさせる機会を設ける。	・子どもが読書時間を割いてまで長時間メディアと関わっていることについては、保護者も家でスマホ等を触らずに過ごす時間を作るなど、親が手本となることが、児童・親両者にとっても必要なことだと思う。PTAからの発信も必要ではないか。 ・保護者アンケートによって、保護者もメディアや視力低下等について自分の生活を見直す機会になればよい。 ・視力やメディアとの関わりについては、中学校や幼保との連携も行うと良い。
	②	体力・運動能力調査結果を踏まえ、体力の向上に努める	特別活動部	休憩時間に体を動かしている児童は多いが、運動能力調査の結果に反映されるまでには至っていない。また、運動を好まない児童もいる。	【成果指標】 マラソンやなわとびチャレンジカード等に意欲的に取り組み、体力・運動能力の向上が見られる。	A：90％以上いる B：70％以上いる C：50％以上いる D：50％未満いる	88.1% (児) 100% (教)	B	児童・教職員の肯定的評価は共に高い。	走ること、柔軟性を高める運動に取り組んでいけるように、指導方法や取組方法を教職員で共有していく。また、児童が興味関心をもって取り組めるような内容を工夫し、「できた、楽しい」と実感できるよう成果の視覚化を考えていきたい。	
5 手教ミ職ド員のリ超過ダ勤―務の縮成と若	①	教職員の勤務時間の管理意識を高める	管理職	超過勤務はやむをえないという意識から、ワークライフバランスや適正な勤務時間のさらなる意識向上が必要である。	【成果指数】 一人あたりの平均時間外勤務時間が前年度比で5％以上減っている。	A：10％以上減っている B：5％以上減っている C：3％以上減っている D：減っている時間が3％未満	74% (教)	D	前期より肯定的評価は15％程度上がっている。	前期に比べて、確実に退勤時刻が早くなっている職員が増えた。学年内で教材研究や仕事分担を行っている成果が出てきたものと思われる。今後も仕事が偏らないよう複数で対応する体制を継続していきたい。	・先生方の残業時間がもう少し削減できると良い。新しく先生になろうという学生が、残業が多いからという理由で断念していることがあったため。
	②	自身の課題に向かって協働しながら主体的に職務を遂行する	教務部	それぞれの職務に対して、担当者任せきりにするのではなく、より主体的・協働的に遂行する姿勢が求められる。	【満足度指標】 自ら進んで職務を遂行し、今までよりも自信をつけることができたか。	A：よくあてはまる B：おおむねあてはまる C：どちらかといえばあてはまらない D：あてはまらない	100% (教)	A	肯定的評価は前期より上がっている。	カリマネの柱「表現活動の充実」を意識し、組織的な取組となるよう成果と課題を明確にしたり、課題についての改善策を講じたりしたことで、主体的な職務の遂行につなげることができた。	